2026年11月22日

説教題『自分の口で』ローマ使徒への手紙 10 章 5〜13 節

主任牧師　加藤　誠

「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」（ローマ10章10節）

先日小学生から「バプテスマを受けたら何ができるようになるの？」という質問を受けました。「何ができるようになるか？」の前に「バプテスマで何が変わるの？」という質問に応える必要があるかもしれません。この問いに対して「バプテスマを受けることで罪が赦される」と答える教会があります。また「バプテスマの水は特別な水であり、罪を赦す力を持っている」と考える教会もあります。それらの理解に対し「水そのものには罪を赦し清める力はない。バプテスマという儀式で人の罪が赦されるのではない」と理解する教会があります。多くのバプテスト教会はこの理解に立ちます。では、いつどうやって罪は赦されるのか。「罪の赦しは主イエスの十字架において成し遂げられた。その十字架において私たちの罪は清められ赦されている」と信じます。ではバプテスマとは何か。「十字架にあらわされた神の愛と赦しを感謝して受け入れます」という信仰告白をもってクリスチャンになる儀式です。

「バプテスマを受けると罪が赦される」という理解では「バプテスマ」⇒「罪の赦し」という順ですが、「罪の赦しは十字架で成し遂げられた。その赦しを受けてクリスチャンになるのがバプテスマ」という理解は「罪の赦し」⇒「バプテスマ」という順になります。また「バプテスマを受けると罪が赦される」という理解は、逆に言うと「バプテスマを受けないと罪は赦されない」という理解になりますが、「十字架において罪の赦しは成し遂げられた」という理解では「罪の赦しは、バプテスマを受けた、受けないに関わらず、すべての人に与えられている」という理解になります。クリスチャンになれば罪は赦されるのではありません。パウロは「私たちが罪人であったときに、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神は私たちに愛を示されました」と語っています（ローマ 5：8）。十字架の救いは罪人であるわたしのためであり、すべての私たちのためだからです。

ではなぜバプテスマを受けるのでしょうか。それは「罪の赦しを受けるため」ではなく「神の愛と赦しに感謝をあらわす喜びのバプテスマ」であり「これからずっと神の愛につなげられて生きていきますという信仰告白のバプテスマ」だということです。そして、バプテスマを受けてキリストの恵みに沈められて生きる歩みには、神からいただく喜び、慰め、励まし、勇気があふれていくからです。例えば、子に深い愛を注いでいる親が、その子の知らないところでいろんな骨折りをしながら愛を注いでいるとして、子が「自分は親の愛につながらなくても、自分の力だけで生きていける」と親に背を向けて歩むのと、深い親の愛を大切に受け感謝をあらわしながら生きていくのとでは、その人生の質がまったく違ったものになるように、どんなに親が深い愛を注いでも、その愛につながらないなら、その深い愛からいただく安心、信頼、喜びを味わうことはできません。イエス・キリストの信仰とは、十字架にあらわされた神の

深い愛と赦しにつなげられて生きることです。そして、十字架の愛と赦しを土台とするとき、主イエスからの安らぎ、喜び、勇気、希望がその人の人生にあふれていきます。イザヤが 54 : 10 で語っている「決して揺らぐことのない神の慈しみ」を土台にするとき、パウロが第二コリント 4 : 8 で語っているように、どんな苦難の中にあっても「見捨てられず、打倒されない、主イエスの復活の命」に生かされるのです。

その意味で「バプテスマを受けると何が変わるの？」という問いには「バプテスマを受けて主イエスの救いを受け取って歩み始めると、主イエスの愛と励まし、慰めと勇気など、たくさんのプレゼントをいただけるよ」と答えたいのですし、「バプテスマを受けると何ができるようになるの？」という問いには「小さな自分一人の力ではできないことが、主イエスの助けと導きをいただいていろいろできるようになるよ！」と答えたいとわたしは思います。

そのバプテスマを受ける時に、今朝のローマ 10 章でパウロが書いているように「自分の口で公けに告白すること」をバプテストは大切にします。「自分の口で」とは「自分で考えて」「自分で選び取って」ということです。「親のせい、家のせいにしない」ということです。他人がどうあろうと「わたしはイエスを選んで生きる！」ということです。ですからバプテスト教会は、バプテスマを受けた後も、自分で考え続けること、自分で聖書を読み続けることを大切にします。バプテスマはクリスチャンとしての最初の一歩であって、この世界や人の人生、信仰についての問いが一挙に解決して分かるわけではありません。この世界には分からないことだらけ。キリスト教自体も完全ではなく「大丈夫なのか？」という疑問もたくさんある。そのときに誰かがこう言ったからではなく、それぞれ自分で聖書を開き、神から示されたことを大切にして考え続けていく。「自分の口で」とは、そのようにして他人のせいにせず、他人の言葉をうのみにすることなく、自分で考え続けていくことです。

また「自分の口で」というときに、17 世紀に誕生したバプテスト教会はそれまで当たり前だった「嬰児洗礼を止めた」のですが、それはとても大きな信仰的決断でした。なぜなら当時の常識は「赤ん坊に洗礼を授けないと地獄に落ちる」という理解だったからです。「赤ん坊が洗礼を授けないと天国に行けない。地獄行きだ」と人びとが語る中で「自分の子には洗礼を授けません」と言い抜いていく。その信仰的決断には「十字架の主の愛と赦しを信じ切ること」が求められたはずです。「洗礼を授けなくても大丈夫。この子は十字架の主の愛と赦しの中に覚えらえているから大丈夫。この子が自分の口で『イエスは主なり』と告白するまで、主イエスは待ち続け、祈り続けてくださる」という、主イエスへの深い信頼に立ちながら、子どもが自分の口でその信仰を告白できるまで、親は祈っていく。主イエスに従う素晴らしさ、恵みを証していく。そのようにして我が子を神の愛と赦しに委ねて、自分の子に自分の言葉で主イエスを伝えながら祈り続けていくことを選び取ったのが、バプテスト教会なのです。

バプテストらしく、自分の口で告白し、自分で聖書を読み、考え続けることを大切にしながら、この世界にあって、主イエスの十字架の愛と赦しを人生の土台として生きる喜びを、一人ひとりが証して歩んでいきたいのです。